

# ある秋の日の日記

(農林工学系) 佐久間 泰 一

6:40 起床。ラジオ(NHK 第2放送)をスイッチオン、服を着ると布団をたたむ作業が5分

6:45~7:00 ラジオ英語会話

何年間この番組を聞きつづけているだろうか。数えてみると、6年になるようだ。果たして上達しているのだろうか。番組では毎日2つの表現を覚えさせてくれる。だが、ちっとも頭の中にストックされない。土曜日のゲストアワーと称する対談はほとんどわからない。やめたくもなる。だが、この商売をしていると、将来英語圏の国に行くようなこともありうるから、少しでも英語に触れておくことはマイナスになることはないだろう。日課と決めて続けよう。

わずかに10分だが朝のバイク通勤もそろそろ厚手のジャンパーが欲しくなった。

9:00 研究室。事務室から農業新聞を持ってきて、ページをめくる。

日米のコメ生産費比較という記事がある。日本はアメリカより10倍も高い。アメリカの経営規模が、150haと日本の250倍も大きくては、この程度の差はあっても当然だろう。

そういえば、昨年からのコメの自由化をめぐる世論が騒がしい。日本の米価が高いのは、経営規模が極端に小さいからで、大規模経営を指向しなければならないことは明らかである。

実は、私の研究テーマは、大規模経営と圃場整備との関係、すなわち、家族労働力で大規模経営をやる場合に、どのような圃場整備をやればよいのかというものであり、アップトゥデートな問題だ。

ところで、コメは、当分の間自由化されないだろうが、あえて自由化されたと仮定してみよう。そうすると、日本の米作は壊滅状態になり、世界の米需要量が多くなる。供給量はそれに見あうように増加し、国際米価は高くならずにすむだろうか。特に、降雨量が日本よりはるかに少ないアメリカで、水田を増やすことができるだろうか。そう簡単にはかんがい用水を得られないのではないか。予想されるほどに米価は下がらないだろう。それに、アメリカから輸入するとしても、輸送その他の費用がかなりかかり、われわれが手にする時の小売価格もそれほど低くならないのではない。バドワイザーは、日本ではアメリカでの価格の3倍以上に高くなっているという。

それにしても、今年の米価は6%もよく下げたなあ。

米価のことを考えていると、隣人から昼食の誘いがかかった。

12:00 昼食そして食後のコーヒー

3学期になると、土壌環境工学の授業が始まる。そろそろ準備を始めなければならない時期だろう。環境科学は様々な分野から院生が集まっているようだから、わが農業土木のアピールでもやるか。

農業土木とは何をやるんですかと人から聞かれたことがある。水田の圃場整備にかかわることを

研究していますと言っても、その人にはわかってもらえず、かんがい、排水もやりますと言うと、納得したような顔をしていた。こんなことではいかん。

水田や畑の整備、そのかんがい・排水、開墾、干拓などにかかわる技術を研究するのが農業土木と言ってよいだろう。新しいところでは農村計画もやっている。

わが農業土木は、以上のような土木工事をやる。これは、古くから行われていた。日本では、弥生時代の登呂遺跡の水田に水路がみられるし、世界に目を向けると、エジプトやインダスなどの4大文明の時代にすでにかんがい技術がみられる。4大文明においては、実際的な必要にせまられて、数学や天文学などの学問が生まれたわけであるから、農業土木は、学問の先祖であると言って決して言い過ぎではない。

環境というと、自然あるいは自然保護という言葉を連想する。自然を保護せよという運動が、いつのころから盛んになったのだろうか。公害のひどさが顕著になったころかもしれない。

数年前、新幹線による騒音などを訴えた訴訟と、火力発電所建設による環境破壊を訴えた訴訟が相ついで敗北した。健康な生活を確保しようという環境権が、日本でまだ認知されない現状では、「自然を共有する権利」が認められるのは、相当に遠い未来のことであろう。

ところで、自然とは何か。どのように定義されるのか。

辞書をひもといってみよう。広辞苑によると「天然のままて人為の加わらぬさま」と定義されている。天然のままとは、人為の加わらぬさまとは、どういうものなのか。原生林のことか。珊瑚礁のことか。堤防によって河道が固定されている川はどうか。植樹して成長した森林はどうか。

わが農業土木がやっている土木工事は、もともとあったものを作り変えることである。辞書の定義によると、私は自然を破壊するものということになる。自然保護論者からみれば、私は糾弾されなければならない。

だが、天然のままて人為の加わらぬさまがこの世の中にどれだけあるのだろうか。南極の氷にまで排気ガスの鉛がとりこまれているという現在、地球の上に真の自然が存在するとはあまり考えにくい。

仕事でときどき農村に出かける。そのとき森や水田を見て、名前も知らない鳥たちの声や沢を流れる音に聞きほれていると、思わず自然はいいなあと感じてしまう。このような「自然」はなくならないで欲しい。

この矛盾をどのように解決すればよいのだろうか。「自然」とどのようにつきあえばよいのだろうか。

「自然」は、辞書に書いてあるような定義でよいのであろうか。

人によって「自然」を感じる対象は違いがあるのではないか。都会の人は、たとえ人為的な水田や森であろうと、たまにしか見ないから「自然」を感じ、農村の人は、日常見慣れない海や山奥の溪谷を、「自然」と思う。

このように、日常的でない「自然のようなもの」を自然とを感じるのであるから、この点から自然を考えて自然を定義することはできないだろうか。

こんなことを考えていると、外が暗くなるのを感じた。もうすぐ5時だ。帰る用意をしなくては。今日は、ノバホールでオーケストラのコンサートがある。いつもより早く帰ろう。演奏会は、6時半からだ。

10：00 寝酒。

富山からつくばに来て3年、幸せだなあとつくづく思う。今夜のマーラーは素晴しかった。ノバホールでのコンサートは数多い。ドイツリートあり、ピアノあり、チェロあり、弦楽四重奏あり。ないのはオペラだけだ。1年に10回ぐらいは聞くことができる。雪国の富山も今は懐かしいが、年に2～3回しかなかった。コンサートを聞くためにつくばに転勤してきたようなものだ。

そろそろ寝る時刻だ。今日はろくに仕事をしなかった。後悔の念。

目覚ましを6：40にかけて。

お休み。